



第5章

これからの オーラルケア

～ ライオンがめざす未来 ～

少子化、高齢化が急速に進み、今までとは全く異なる社会環境の中で、これからの口腔保健活動はどうあるべきか？ 最終の第5章では、過去から未来へと視線を移し、次の100年、ライオンがめざす口腔保健活動の青写真を紹介します。



健康日本21

国民運動へのひろがり

口腔保健活動が国家プロジェクトに

1913年（大正2年）から、口腔保健活動に努めてきたライオン。その長く地道な活動によって、今や口腔保健活動は、国家プロジェクトとして行政が推進する時代になった。1989年には、厚生省が80歳で20本以上の歯の保持を目的とする「8020運動」を提言。さらに、「健康日本21」（21世紀における国民健康づくり運動）が2000年にスタートし、その法的基盤である健康増進法の中で「歯の健康の保持」が大きな目標として掲げられた。さらに厚生省は2009年、「8020運動」の一層の推進をめざし、ひと口30回以上噛むことを目標としたキャッチフレーズ「噛ミング30」を作成。より健康な生活のために、国民への広い浸透をめざしている。

また、2011年、日本歯科医師会が長年成立をめざしてきた「歯科口腔保健法」が制定。これは、「口腔の健康は、心身の健康に重要な役割を果たしており国民保健の向上に寄与するため、歯科疾患の予防等による口腔の健康保持・推進に関する施策を総合的に推進すること」を目的とした「基本法」であり、国が人々の歯の健康に責任をもつことを明らかにした意義深いものとなった。

「健口美」の実現でQOL向上を

すべての健康は口からはじまる

国や行政による口腔保健活動が活発化する中で、ライオン歯科衛生研究所は、2010年(平成22年)に公益財団法人の認定を取得。新たな社会的責任を担い、歯の健康への一層の貢献に意欲を燃やしている。とくに、日本では高齢社会への対応が急務となっているが、80歳で20本以上の歯を保持している人はまだ約40%に過ぎない。この改善には、従来のようなむし歯予防だけでなく、生涯にわたって「健康な口腔を保つ」取り組みが必要になる。また、歯周病と全身健康との関連性が明らかになるにつれ、歯の健康が、健康寿命の延伸に欠かせない課題となっている。

そこで、ライオンは、「健やかな口が身体と心を美しくする」^{II}「健口美」というコンセプトを掲げ、「食べる」「話す」「笑う」など、日常生活に欠かせない役割をもつ口腔のケア意識を高める活動を展開。Oral Health・Oral Beauty・Communicationを健全に保てるよう適切なケアを指導することで、心と体の健康増進を図り、健康寿命の延伸とQOL向上をめざしていく。また、こうした活動を60ページから紹介するライフステージ別に展開することで、健康で豊かな高齢社会づくりに挑戦する。

健やかな口が身体と心を美しくする

健康寿命の延伸

QOL (生活の質) の向上

身体健康増進

心の健康増進

食べる

話す・笑う

健口美

Oral Health

Oral Beauty

Communication

大切な健康習慣を子どもものうちに

学童期の口腔保健活動

墨田区の食育イベントでの指導のようす。
幼少期に健康習慣をしっかりと身に
付けることが生涯の健康につながる。



子どもたちへの活動は、伝統ある「学童歯みがき大会」に加えて、日常生活での健康習慣の定着に力を入れていく。これは、多彩な学童向け活動を通して、12歳児のむし歯経験歯数は平均わずか1・00本（2014年・平成26年）にまで減少したものの、歯みがき習慣がきちんとして定着しないためか、思春期以降、むし歯や歯周病が増加傾向にあるためだ。この時期の健康習慣の形成は、その後の健康の保持増進に大きく影響するため、健康習慣が定着化するようさらに啓発していく必要がある。具体的には地域に密着したイベントや課外授業の中で、幼稚園児、小学生、母親などを対象に、歯みがき指導などの啓発活動を粘り強く展開している。

また、沖縄県石垣市では、2012年から、市教育委員会・養護教諭、学校歯科医と連携して小中学生の歯みがき習慣や保護者の意識を調査するアンケートを実施。その結果を健康習慣の定着に活かすとともに、地域全体を巻き込んだ「子どもの口腔の健康から・健康な地域づくり」の実現をめざしている。

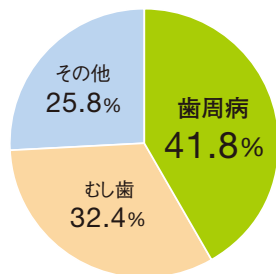
歯周病の啓蒙活動を強化

成人期の口腔保健活動

成人期における最大のテーマは歯周病対策だ。この時期に適切なケアを行うことが「8020運動」の達成や、将来の健康へつながる大きなポイントになる。

歯周病とは、歯と歯ぐきの間（歯周ポケット）などに溜まった歯垢に歯周病菌などが繁殖して起こる病気だ。歯を失う原因の第1位でもある恐ろしい病気だ。歯周病を防ぐには、歯ブラシや歯間ブラシなどによる日常的なケアに加えて、生活習慣の改善も大きなカギになる。喫煙や疲労の蓄積、睡眠不足、ストレスなどによる抵抗力の低下は歯周病リスクを高める大きな要因だ。とくに喫煙は、口腔内を歯周病菌の繁殖しやすい環境にする上、ニコチンが体を守る毛細血管の働きを抑えてしまうため歯周病が進行しやすく、気づいた時には重篤化していることが非常に多い。さらに、ストレスによる免疫力低下も歯周病を悪化させ、治りにくくする原因になっている。成人期の口腔保健活動は、こうした歯周病についての啓蒙活動をしつかりと行うことが重要になっている。

歯を失う原因



痛みがほとんどないため気にする人は少ないが、歯周病は歯を失う怖い病気（公財）8020推進財団「永久歯の抜歯原因調査」より。

歯周病は全身疾患につながる

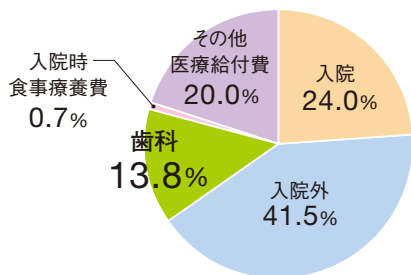
口腔は感染の入り口

ライオン歯科衛生研究所による「歯周病リスク検査プログラム」活動。2012年には11月24、25日に実施し980名の参加者に検査指導を行った。



また最近の研究で、歯周病が、糖尿病や動脈硬化などさまざまな全身疾患に悪影響を及ぼすことが明らかになっている。口腔は、食べ物の入り口であると同時に、細菌やウイルスなどの侵入口でもある。とくに歯周病患者の場合は、細菌の侵入を防ぐ粘膜が歯周ポケット内でただれ落ちているため、細菌が容易に毛細血管に入り全身へ広がってしまう。体内に侵入した歯周病菌は、糖尿病を悪化させる原因になることがわかっており、さらに、脳梗塞や心筋梗塞など動脈硬化性疾患のリスクを高めることも明らかになっている。ライオンでは今後も、医療従事者と連携しながら歯周病と全身疾患との因果関係をさらに解明し、有効な対策を提案していく。また、一般の人々に歯周病への関心を高めてもらうために、独自に開発した「歯周病リスク検査プログラム」や「歯周病予防プログラム」などを積極的に展開。生活習慣のアンケートや歯肉の潜血測定、口腔内清掃度測定などを通して将来歯周病になる可能性を判定。リスクの高い被験者には、歯周病の予防対策をアドバイスしている。

健康保健組合の保険給付費の内訳



2007年度の医療給付費
(現金給付、付加給付を除く)
総額1兆4054億円の内訳

歯周病対策で医療費抑制

歯周病が重篤な人ほど医療費が高額に

さらに、歯周病は罹患率が非常に高く、医療費増大の一因としても指摘されている。厚生労働省の調査によると、40歳を過ぎると歯周病にかかる人が急増し、40〜64歳の日本人の約半数が歯周ポケット(歯周炎)を有することが明らかになっている。このため歯科医療費が大きく膨らみ、健康保険組合の医療給付費に占める歯科医療費の割合は約14%。入院治療を除くと、全体の約5分の1を歯科医療費が占める事象となっている。また、歯周病は全身疾患にもつながるため、歯周病が重篤な人ほど総医療費が高額になる傾向があり、歯周病のない人に比べて累計医療費が21%も高くなる調査結果も発表されている。

ライオンは、こうした働き盛りの人々の健康を守るとともに、健康保険組合の医療費適正化を支援するため、従来から行っている職場での産業歯科保健活動の中で、社員に対する歯周病予防の啓発や、企業に合わせたオリジナルプログラムを提案。こうしたライオンの活動に参加した企業では、一人当たりの歯科医療費を6年間で約2万8千円も節減することに成功するなど、大きな成果をあげている。

健康寿命の延伸をめざして

高齢者の口腔保健活動

高齢者向けの口腔保健活動では、口腔の健康を通して、健康寿命の延伸に挑戦していく。日本は、男女ともに平均寿命が80歳を超え世界有数の長寿大国となったが、寝たきりにならず、自立した日常生活を送ることのできる健康寿命は、男性71・19歳、女性74・21歳（厚労省、2014年・平成26年）に留まっている。ライオン歯科衛生研究所では、両者の溝を埋めるため、口腔を健康な状態に保持することで、健康寿命を伸ばす取り組みを行っている。

例えば、京都府の京丹後市と大阪府の寝屋川市の特別養護老人ホームでは、オーラルケアによって誤嚥性肺炎を予防する取り組みを実施している。高齢者は、食べ物を飲み込む時、誤って気道に入ってしまうことがあり、その際、口の中や入れ歯が清潔に保たれていないと肺に雑菌が入り肺炎を引き起こす恐れがある。そこで、お年寄りや施設職員に口腔清掃の指導をすることで、肺炎予防につながる活動を実施。有用なケア方法を全国に展開することで、健康寿命の延伸に貢献している。



口腔を清潔に保つことが、高齢者の健康寿命の延伸につながる。

口腔機能の向上で認知症予防

また、ライオン歯科衛生研究所では、口腔機能をどのように維持増進させれば、高齢者の健康に貢献できるのか、具体的な手法を開発するための調査研究も行っている。

沖縄県宮古島市では、2012年から2013年にかけて、高齢者の口腔機能を向上させることで、認知機能の低下を防ぐ検証調査を行った。この研究は、ライオン歯科衛生研究所と東京都健康長寿医療センター研究所が共同で行ったもので、地元の歯科衛生士と保健師の協力を得て、65歳以上のお年寄り計162名に対して5カ月間「口腔機能向上プログラム」を実施。口腔の機能を高めるさまざまなトレーニングをしてもらうことで、高齢者の「かむ力」や「飲み込む力」「口全体の清潔度」などが高まり、「遂行機能」「注意機能」なども向上。認知機能の低下抑制につながる可能性を見出した。この結果は、2014年3月に宮古島市平良保健センターで行った報告会で発表され、歯科衛生士や高齢者施設の関係者に対して、口腔ケアの大切さを訴えることができた。



さまざまな道具を使って口腔機能の維持増進を図る。

健口美体操で口を元気に

いつまでもおいしく食べるために

ライオン 歯科衛生研究所では、口腔機能の向上によって、高齢者の健康を維持増進する活動をさらに幅広く展開するために、お年寄りが簡単にできて、口腔機能を高めることができる「健口美体操」を開発。「口のまわりを元気にする」「かむ力を元気にする」「飲み込む力を元気にする」の3つの体操を組み合わせ、口腔機能を支える筋肉に鍛えることで、誤嚥防止や窒息などによる事故防止を図っている。

「口のまわりを元気にする」体操は、唇や頬の筋力を鍛えることで、食べこぼしの予防や正しい発音を可能にするとともに、豊かな表情を作り出すことができるようになり、お年寄りの生活を社交的で活動的にする効果も期待できる。「かむ力を元気にする」体操は、食べ物を咀嚼する力を高め、唾液もたくさん出るようになるので、お年寄りが食事をおいしく安全に楽しむことができるようになる。さらに唾液がたくさん出るとは「口の中を清潔にする」「むし菌や歯周病を予防する」「飲む込みやすくする」などの効果があるほか、しっかりと嘔むことで、脳が活発に働き認知症の予防にも役立てることができるとも、また、「飲み込む力を元気にする」体操では、飲み込むときに使う筋肉を鍛えることで、唾液や飲



「健口美体操」の効果や方法をわかりやすく紹介するDVDを制作。口の元気を高める活動を推進している。

健口美体操

Lesson 1

「口のまわりを元気にする」体操

1 「ウー」「イー」と口を大きく変化させる



口を思いきりすぼめて。



唇を大きく横に引く。



2 頬を大きく膨らませる



左の頬を膨らませる。



右の頬を膨らませる。



両方の頬を膨らませる。

食物が気管に入ってしまう誤嚥を予防できる。
ライオン歯科衛生研究所では、各地の自治体と協力して口腔ケア講習会などを開催し、「健口美体操」の普及を図り、お年寄りが、いつまでもおいしく食べ、楽しく話し、笑いのある生活を送れるように活動を展開している。

世界で評価される
ライオン歯科衛生研究所

歯周病とメタボの関連性を解明

● 欧米でのダブル受賞を達成

歯周病がさまざまな病気の原因になることが指摘されるなか、ライオン歯科衛生研究所は、2011年(平成23年)、歯周病がメタボリックシンドロームの発症リスクになることを職域成人を対象とした疫学研究で明らかにした。メタボリックシンドロームは、さまざまな生活習慣病の原因になり、脳卒中、心筋梗塞のリスクを高めることから世界的にも有効な対策が求められており、歯周病対策がメタボリックシンドロームの予防につながることは画期的な発見になった。

この研究は、2011年11月、米国歯周病学会(American Academy of Periodontology)の臨床研究賞(Clinical Research Award)を日本人として初めて受賞。翌2012年6月には、欧州歯周病学会(Europarion7)で過去3年間歯周病関連論文の中から、ライオン歯科衛生研究所の論文が第1席を受賞した。

ライオン歯科衛生研究所の調査研究活動は、文部科学省から科学研究費認定機関として高い評価を受けているが、今回の米国・欧州ダブル受賞により世界からも大きな注目を集めることとなった。



米国歯周病学会・臨床研究賞を受賞。



「健康をみかく 笑顔をふやすシリーズ」は、コンパクトな新書版サイズで約200ページ。イラストを多用したわかりやすい構成になっている。

ライフステージ別の元氣習慣を提案

「健康をみかく 笑顔をふやすシリーズ」発行

幸せな毎日を過ごす秘訣は「自分の健康を見つめ、良い習慣づくりを行うこと」と考えるライオンは、歯や口の健康だけでなく、全身の健康増進に貢献する幅広い情報発信活動を行っている。2015年には、「健康をみかく 笑顔をふやすシリーズ」として、ライフステージ別に、実践してほしい元氣習慣をまとめた書籍を発行した。

本シリーズは全4冊で構成され、幼児期向けには「赤ちゃんがパパとママにやってみてほしい58のこと」と題して、栄養面からしつけまで子育ての秘訣を解説。さらに学童期向けには「学校では教えない・できる子をつくる74の習慣」、成人期向けには「働く世代が意外と気づかない体の危険信号・これに気づくと人生が一気に好転する。」、そして、高齢期向けには「頭と体を元気に・生涯さびないためのトレーニング」と題して、生涯健康・生涯現役で過ごすために知ってほしい情報を満載。いずれも、「健康」「快適」「環境」をキーワードとして、すべての世代の幸せな今日と未来への貢献をめざしている。

もうひとつのテーマ「予防歯科」

予防歯科の習慣化をめざして

第5章

ライオンがめざす未来

ライオン歯科材（株）は、情報誌「Dent.File」等にて、予防歯科に取り組む歯科医院や歯科衛生士を紹介。予防歯科の普及に努めている。



前述のライフステージ別ケアに加えて、ライオンが、これからの時代のもうひとつのテーマとして取り組んでいるのが「予防歯科の習慣化」だ。「予防歯科」とは、口腔の病気を予防し機能を維持するために、適切なケアを行うことであり、ライオンでは、その具体策として歯科医師などによる定期的な「プロフェッショナルケア」と、自分で行う「セルフケア」の習慣化を提唱している。

また、予防歯科の普及をめざして、ライオンはグループをあげて幅広い活動を推進。ライオン（株）は、ブランドキャンペーン、広告などを通して、生活者に対する予防歯科の啓発活動を行い、歯科材料や歯科治療機器を製造販売しているライオン歯科材（株）は、歯科医師や歯科衛生士向けに、予防歯科の最新情報を提供。予防歯科診療をサポートするとともに、予防歯科を担う医院の増加を促している。また、ライオン歯科衛生研究所は、生活者向けに定期健診の受診や、メインテナンス受診の勧奨のほか、歯科医院への情報提供などを実施。各社による重層的な活動で、予防歯科の啓発と浸透を促している。

日本初の児童専門の歯科診療所「ライオン児童歯科院」(1921年設立)をルーツとする「東京デンタルクリニック」。現在では、予防歯科の先進診療所として新たな役割を担っている。



東京デンタルクリニックで予防歯科医療を強化

また、ライオン歯科衛生研究所では、自らの歯科診療事業においても、予防歯科を積極的に導入。「東京デンタルクリニック」では、従来型の「削る」「抜く」「入れ歯を入れる」という対処療法から、再発防止のための予防管理(メインテナンス)ができる診療体制へ大きな転換を図っている。

う蝕は自然治癒がなく、歯周病も疾病前の状態に戻すのはほとんど不可能であることから、歯科疾患は一度かかったら取り返しがつかない疾病と言える。このため、歯科先進国である北欧や米国では、歯科疾患の予防管理(メインテナンス)が普及し80%以上の人がメインテナンスのために診療所へ通っている。そこで「東京デンタルクリニック」では日本でのメインテナンスの普及へ向けて、受け入れ体制を整備。一人ひとりの歯科口腔疾患リスクに合わせた予防処置を行う「リスク・コントロール・デンティストリー」を導入。「唾液PH」や「唾液中総細菌数」など最大7種類のテストで患者のリスクを正確に判定し、定期的なケアを行うメインテナンス体制を構築している。

歯科衛生士が「予防歯科」の担い手に

患者担当制できめ細かなメインテナンスを実施

また、「東京デンタルクリニック」では、「リスク・コントロール・デンティストリー」を効果的に実践するために、歯科衛生士が大きな役割を担っている。患者に対する最終的な責任は歯科医師がもちながら、むし歯治療の終了した患者や、病状の安定した歯周病患者のケアマネジメントを歯科衛生士が担当。高度な「プロフェッショナルケア」の技術を習得した歯科衛生士が、専門的なリスク検査と、それに基づくスクリーニングなどのメインテナンスを行っている。また「東京デンタルクリニック」では、一人の患者を、専任の歯科衛生士が継続してケアする担当制を導入。一貫性のある予防プログラムや保健指導で、患者の歯と口の健康をトータルにサポートしている。

「東京デンタルクリニック」の前身である「ライオン児童歯科院」は、かつて、日本で初めて歯科衛生士（当時は口腔衛生婦）を育成した診療所でもある。つねに、人々の健康を願い、積極的に新たな挑戦を行う風土が、90余年を経た現在も、脈々と受け継がれていると言える。

世界へひろがる「学童歯みがき大会」

海外5千校・50万人の参加をめざして

学童のむし歯予防に大きく貢献してきた「学童歯みがき大会」は、1932年（昭和7年）の開始から80余年を超えた今も、年々進化を遂げている。従来の「歯磨体操」のような集団指導から、歯みがきを含めた生活習慣の問題を解決する「個別指導型」へと変わり、2008年の第65回大会からは、インターネットによる同時配信もスタート。気軽に大会に参加できる新しいスタイルを確立した。

また、ライオンでは、アジアを中心とした海外でも口腔保健活動を展開し、1984年の台湾を皮切りに、韓国、中国、フィリピン、ベトナム、タイ、マレーシア、インドネシアなどへ活動の輪を拡大。そのなかで、「学童歯みがき大会」への海外からの参加も年々増加し、2015年の第72回大会では日本国内からの参加校1287校に加え、アジア7カ国・地域から15校が参加。総参加校数1302校という国際的な一大イベントへと成長した。インターネット配信で、各国・各学校に居ながらにして同じ教材を使って大会に参加できるので「楽しく歯と口の健康を学べる」と関係者から高い評価を獲得。ライオンでは、今後も、国内2万校・100万人、海外5千校・50万人の参加をめざし、子どもたちの健康増進にさらなる意欲を燃やしている。

第70回「学童歯みがき大会」にインターネットを通して参加するタイの小学生たち。



情報のバリアフリー化に挑戦

立体表現でわかりやすい『さわってわかる
歯みがきの本』(右)と『キッザニア東京』(左)。



すべての人に口腔保健活動を

ライオンでは、口腔保健活動のさまざまな取り組みを、より多くの人々にお届けできるように、情報発信の多様化にも取り組んでいる。

視覚障害者に対しては情報のバリアフリー化を進め、点字および大活字による製品情報を年2回発行しているほか、1994年からは障害者向けの歯科指導も開始。さらに、口腔衛生についての理解を深めてもらうために、2004年に『さわってわかる 歯みがきの本』を制作。盲学校などで用いられている絵や図を凹凸で立体的に表現した触図の技術を用いたもので、手で触れてもらいながら講習を行うことで格段に理解を得られやすくなった。

また、ハミガキ発売110周年にあたる2006年には、職業体験型テーマパークである『キッザニア東京』に、「歯科医院」のパビリオンを出展。歯科医師の仕事を楽しく疑似体験することで、子どもたちに歯の大切さを実感してもらえる機会を提供している。



COI: The Center of Innovation Program

健康寿命の延伸へ向けて

将来を見据えた国家プロジェクトに参画

将来へ向けた新たなチャレンジとして、ライオンは、2015年(平成27年)から文部科学省の主導する産学官連携の国家プロジェクト「革新的イノベーション創出プログラム(COI STREAM)」に参画。弘前大学を中心としたチームに加わり、地域住民の長年にわたる膨大な健診データ(ビッグデータ)から、生活習慣病や認知症など、健康寿命を左右する疾患の予知・予防方法の開発に取り組んでいる。このチームには、多くの研究機関や民間企業が参加し、それぞれの切り口で課題に取り組み中、ライオンは「口腔からスタートする健康づくり」に挑戦。本プログラムは、従来、ほとんど行われなかった歯科と歯科の連携による画期的な試みでもあり、研究成果に大きな期待が集まっている。

100年を超えて、口腔保健活動に情熱を傾けるライオン。「事業を通して人々の幸福に奉仕する」創業の志を大切に受け継ぎながら、これからも、進取の精神あふれる行動力で、人々の健康と笑顔のために弛まぬ努力を続けていく。

次代の課題に挑戦する
LDHシンポジウム

健康長寿に貢献する歯科医療をめざして

● 歯科医療従事者向けのシンポジウムを開催

シンポジウムは、日本歯科医師会、8020財団、日本歯科衛生士会などの後援を得て、東京の虎ノ門ヒルズフォーラムで開催された。



ライオン歯科衛生研究所は、「健康寿命の延伸に向けた歯科医療の使命と可能性」をテーマに、第一線で活躍する研究者、歯科医師などが集い、講演、総合討論を行うシンポジウムを2016年6月26日に開催。基調講演にはアメリカ歯周病学会・前会長、ジョアン・オウトモ・コーグル氏が登壇。「米国では歯周病と糖尿病、心臓病、骨粗しょう症、呼吸器疾患などの関連性が報告されており、今や歯科医療従事者は健康を守る最前線に立っている」とその使命の大きさを指摘した。また、東北大学大学院教授の辻一郎氏は、健康寿命の延伸には医科歯科連携が重要であり、早期の取り組みが急務であると提言。大阪大学大学院教授の天野敦雄氏は、歯周病菌が全身に悪影響を与えるメカニズムについて解説し、口腔の生涯メンテナンスの必要性を強調した。さらに、パネル討論では開業医も参加して熱い議論を展開。人類最大の感染症と言われる歯周病の克服には、最先端治療と、地域の歯科医院による長期的な予防歯科が必要だとその認識を共有し、歯科医療の歩むべき道を明らかにする有意義な機会になった。

人はなぜ、歯をみがくようになったのか？

● 「歯みがき100年物語」刊行

人はいつから歯みがきを始め、どのように習慣として定着したのか。ライオン歯科衛生研究所では、口腔保健活動の基本である「歯みがき」に焦点を当て、その歴史と普及活動の歩みを紹介する「歯みがき100年物語」を2017年に発行した。

歴史を振り返る第1章では、古代エジプトやローマ時代の歯みがき剤や、楊枝を使った平安貴族の歯みがき法、砂や塩で歯をこする江戸時代の歯みがきなど、近世以前の歯みがき習慣を歴史的な資料を交えて興味深く紹介。第二章では、明治以降、日本に歯みがき習慣を定着させるために、ライオンをはじめとする民間企業や歯科医師の団体などが行った口腔保健活動のあゆみを詳しく紹介。さらに、歯みがきの大切さを多くの人々に伝えるために、さまざまな工夫を凝らして制作されたユニークな広告・宣伝や絵本、書籍、映画、イベントなどを第3章に一挙掲載。第4章では、「歯みがきは健康みがき」と題し、全身健康や健康長寿に貢献できる歯みがきの新たな役割を紹介している。全ページにわたってビジュアルが豊富に掲載され、誰にでも読みやすく、文化・生活史としての価値も高い書籍に仕上がっている。



「歯みがき100年物語」、ソフトカバー
B5判 全258ページ。編者・ライオン
歯科衛生研究所、発行・ダイヤモンド社。